Journal of Asian and African Studies, No. 55, 1998

ダルエスサラームのアフリカ系住民社会における遊びと政治

——独立前のカリアコー地区を中心とした都市文化の生成と発展の過程——

鶴田　格
（京都大学大学院）

Popular Music, Sports, and Politics in Dar es Salaam during the British Colonial Period

TSURUTA, Tadasu
Graduate School, Kyoto University

Abstract

In urban area of Tanzania, the communities of native Africans are invariably made up of various ethnic groups or tribes from all over the country. These urban dwellers have been forming inter-tribal relationship through various kinds of cultural activities. In particular, popular music and football have been flourishing throughout Tanzania since the British colonial period. Because of their wide popularity, these two main fields of popular culture have been functioning as a driving force to organize or mobilize the people irrespective of their tribe or religion. As a consequence, popular music and football have always had a close connection with urban politics in Tanganyika (mainland Tanzania), especially in its capital, Dar es Salaam.

From the 1930s to 1950s, Kariakoo area, the oldest settlement of native Africans in Dar es Salaam, was one of the centers of modern musical activities of urban Africans in Tanganyika. There were two main genres of popular music: *taarab* and *jazz*. *Taarab* is said to have originated in Zanzibar under the direct influence of Arab modern music, and became very popular among Swahili people of the East African coast and islands. In East Africa and Zaire, *jazz* denotes a style of dance music originally formed under the influence of Cuban music *rumba* in the 1940–50s, and later developed mainly in Zaire with its peculiar guitar style.

In Kariakoo area, both the first *taarab* group (Egyptian Musical Club) and the first *jazz* band (Dar es Salaam Jazz Band) in Tanganyika were formed in the 1930s. Yanga and Sunderland (now Simba), which have been the most prominent football clubs in Tanganyika over fifty years up to now, were also founded in Kariakoo in the late 1930s. Besides, the African Association, the first political organization for Africans, was formed in Kariakoo in 1929 by influential townsmen such as civil

servants and landowners. The association transformed into the Tanganyika African National Union (TANU) later, and played a crucial role in the struggle for independence through the 1950s. Thus, by the 1950s, Kariakoo had become the cultural and political center not only of Dar es Salaam but also of the whole country.

Such popular movements developed on the basis of a rather close-knit urban community, namely Kariakoo, where people could sustain face-to-face communication. The spread of Swahili language and culture through the first half of this century contributed greatly to create a social base for these multi-ethnic social activities in this geographically compact area.

Throughout the period, there was a close interplay among these musical clubs, football teams, and political parties. In particular, during the time of the struggle against the colonial government, a lot of popular bands and teams came to cooperate closely with TANU for the common purpose of independence, by enhancing people to take part in the political campaign. This fact implies that these musical and sporting organizations provided the townsmen including many migrant workers with more suitable and effective communal bases than any other tribal or religious organizations in urban area at that time.

1. はじめに
2. ダルエスサラームの成立と初期のアフリカ系住民社会
3. タンガニーカ都市部における遊びの組織
4. カリアコーにおける音楽クラブの発展
5. カリアコーにおけるサッカー・クラブの発展
6. ダルエスサラームにおける政治運動の発展
7. 結　論

1. はじめに

タンザニアの実質上の首都ダルエスサラーム[1]の中心部にあるカリアコー Kariakoo 地区は，その最も古いアフリカ系住民居住区のひとつである。同地区は，それが主として青果を扱う国内最大の卸売市場を擁する商業地区であるという点を除けば，現在では数あるアフリカ人居住地域のひとつにすぎない。しかしタンガニーカ（タンザニア大陸部）[2]独立以前の1930年代から60年代初頭にかけて，そこはタンガニーカ都市部におけるアフリカ系住民の文化活動と政治活動が最も先進的な形で活発に行われていた中心地であり，その

1) 1974年以降公式的には内陸部の都市ドドマが首都となっており，現在国会などはそこで行われているが，主要な政府機関等は依然としてすべてダルエスサラームに集中している。

2) タンガニーカ Tanganyika とはドイツ領東アフリカ（1985–1919年）を引き継いだ英国統治下（1919–1961年）における名称であり，現在のタンザニア大陸部を指している。対岸の島嶼部ザンジバルには，19世紀以降アラビア半島から来たスルタンが宮廷を有して一帯の交易を支配していたが，1890年より英国保護領となる。タンガニーカが1961年，ザンジバルが1963年にそれぞれ別個に英国から独立した後，1964年に両者が合邦してできたのが現在のタンザニア連合共和国である。

後全国的に広がる大衆文化と政治運動の揺らんの地としての役割を果たした。そこでは古くから，アフリカ系住民による，村落や部族や宗教などの共同体的関係を超えた多様な人間関係が，スポーツやダンスなどの遊び *michezo*[3] と反植民地政府運動などの政治活動をめぐって，両者がもつれあう形で展開されてきたのである。

各種の近代的なスポーツ競技，トランプやチェッカーなどの卓上ゲーム，同時代の外国の流行音楽の影響下に発達したポピュラー音楽，西欧的な社交ダンスなどの，ヨーロッパ人による植民地支配とともに始まった各種の遊びは，現在にいたるまでタンザニアの都市部において住民が社会関係を形づくる大きな契機となってきた。なかでも広く愛好され続けてきたのが，ポピュラー音楽とサッカーという2大分野である。この両者は当初から卓越した大衆的人気を誇ってきたという点で特異な位置を占めており，またお互いに全く無関係の分野ではない。それは現在でも，ダルエスサラームの国立競技場で行われるサッカーの2大クラブ・チームである Simba と Yanga の伝統の一戦においては，試合前に地元の人気ダンス・バンドがやってきて観客にしばしのエンターテイメントを供する，という組み合わせに典型的にあらわれている。またこの両者は遊びの他の分野と異なり，その大衆動員力のゆえに，常に純粋な遊びの域を超えて経済活動となると同時に，しばしば都市の政治活動とも関わってきた。

これまで，タンザニアの都市部における音楽・ダンス・スポーツなどの遊びの発展過程は，Iliffe (1979) や Ranger (1975) などの歴史学者や，Martin (1980) や Graebner (1992) などのポピュラー音楽研究の専門家によって注目されてきた。なかでも Ranger (1975) は東アフリカにおける遊びと政治の関係について興味深い研究を行っているが，それは主として1930年代以前に流行した *beni ngoma*（後に詳述）というダンス結社をめぐる考察にほぼ限定されている。Iliffe，Martin 及び Graebner においても，その考察の対象となる分野や時代は限られており，また遊びと政治活動の関連については断片的に言及されるだけである。タンザニア都市部におけるポピュラー音楽とスポーツに関する整理された情報じたいが少なく，したがってその発展過程を，政治活動を含む社会全般の動きとの関連において包括的に論じた研究は，いまだ存在しないといってよい。

そこで本稿においては，英国統治下のダルエスサラーム，なかでもカリアコー地区におけるポピュラー音楽，サッカー及び政治に関わる活動が互いに関連しながらどのように展開されてきたかに注目し，かかる都市における新しい文化の生成と発展の過程を検討したい。ただし本稿の目的は，独立運動その他の

3) ダルエスサラーム大学スワヒリ語研究所編纂のスワヒリ語辞書（*Kamusi ya Kiswahili Sanifu*）の最も包括的な定義によると，*michezo*（単数形 *mchezo*）とは「(1) 喜びや楽しみをもとめて，あるいは時間をつぶすためにする物事，(2) 競争のために一人であるいは複数の側に分かれて行う事」となっており，具体的にはスポーツ競技，卓上ゲーム，ダンス，子供の遊び，演劇などを指す。またその動詞形 *ku-cheza* は，英語の play とほぼ同様に，「(スポーツ，ダンス，ゲーム，劇等を) プレイする」という意味で使われるもっとも普通の動詞である。しかし，現在のダルエスサラームにおける日常的な用語法においては，*michezo* といえばスポーツ競技のイメージがかなり強く，卓上ゲームや（多くの場合音楽的パフォーマンスを伴う）ダンスは含まれるとしても，音楽それ自体とその演奏や鑑賞は含まないと考える人が多いと思われる。上記の辞書の定義や，一部の新聞やテレビにおいては *michezo* のコーナーにおいてスポーツとポピュラー音楽の両方に関するニュースが取り扱われることを考えると，理論的には *michezo* には音楽そのものも含まれ得ると主張することは不可能ではないが，以下本稿では上記の実際の日常的用語法を考慮にいれて，*michezo* にはっきりと音楽演奏・鑑賞を含めたものを一括して遊びと呼ぶことにしておきたい。

政治史の文脈からみた遊びの果たした役割を評価するのではなく，あくまで遊びと政治の双方を，どちらも広範囲な社会編成を生起させるところの一種の文化的形式として並列的に論じることにある。したがってここでは遊びも政治も，主としてそれに関わる集団形成とその発展という側面からのみ論じられることになる。

本稿では以上の作業を通して，独立前のダルエスサラームにおける（アラブ系を含む）アフリカ系住民社会の歴史の一側面の素描を試みたい。なお，本論文に記載されている情報は，出所を明記している箇所以外はほとんどすべて，本稿で取りあげる諸活動に当事者として実際に関わっていた人々に対する筆者のインタビューに基づいている[4]。調査は，筆者が在タンザニア日本大使館の職員として当地に滞在した期間中（1995年5月～97年3月）に行われた。

2. ダルエスサラームの成立と初期のアフリカ系住民社会

(1) ダルエスサラームの成立と発展

ダルエスサラーム成立の発端は，ザンジバル島を支配していた Busaidi 朝のスルタン Sayyid Majid が，大陸の沿岸部への勢力拡大などを目的に1865年頃に町の建設を開始したことにある（図1）。1885年前後よりタンガニーカの植民地支配を開始したドイツは，当初ダルエスサラーム北方の古い港バガモヨに行政の本部を置いたが，91年に，近代的な大型船舶が入港可能な深水の港湾を有するダルエスサラームを首都と定めた。近代的な港湾設備を有するタンガニーカの行政の中心地としてのダルエスサラームの歴史は，実質的にはこの時から始まった（Sutton 1970, pp.1-7）。

ドイツ統治時代の末期（1913年）には，ダルエスサラームは22,500人ほどの人口を有するにすぎず，キゴマ，タンガなどのドイツ領内の他の諸都市と比べその重要性は他を圧倒するものではなかった。しかし英国領となって以降のダルエスサラームの人口は，特に第二次大戦終結後に急増し，48年には69,227人，57年には128,742人の人口を有する港湾都市に成長し（表1），タンガニーカの政治・経済の中心地としての位置を確立した。

ダルエスサラームの成立当初，植民地支配者たるヨーロッパ人と主として商業に従事するアジア人は内港の周囲に居住し，アフリカ系住民はその外側に住みついた。第一次大戦中にダルエスサラームを占領した英国は，人種混合をさけるため町を3つの地区にわけるというドイツ時代の都市計画を1918年に完成させ，アジア系住民の集住する商業地区の西部カリアコー[5]をアフリカ人居住区と定めた（図2）。そこではアフリカ人個人が政府から

4) 特に以下4.，5.及び6.の(3)は，引用文献を明示している箇所以外はすべて筆者が直接得た情報に基づいている。ただし，インタビューしたインフォーマント数はのべ100名以上にのぼり，また複数のインフォーマントから得られる断片的情報を筆者の判断によって総合して記述した場合も多いため，いちいちその出所を記すことはできなかった。また本稿で取り扱ったような独立前のカリアコーの遊びのクラブに関する情報で，文字化された記録が残っているものは皆無に近いため，ほぼ全面的にインフォーマントの記憶のみに頼らざるを得ない場合がほとんどであった。したがって，ここでは信頼できると筆者が判断した情報のみを選んで取りあげたとはいえ，それでもなおインフォーマントの記憶の曖昧さ等に起因する欠点を本稿が完全にまぬがれるものではないことを，あらかじめ断っておきたい。

5) 戦時中に英国の輸送部隊 Carrier Corps がここに駐屯していたことから，この名がある（Leslie 1963, p.22）。以下，本稿でいうカリアコー地区あるいはカリアコーとは，すべてこの英国統治下における Kariakoo ward（図2参照。現在の行政区分では Kariakoo, Jangwani, Gerezani の3つの ward からなる）を指す。

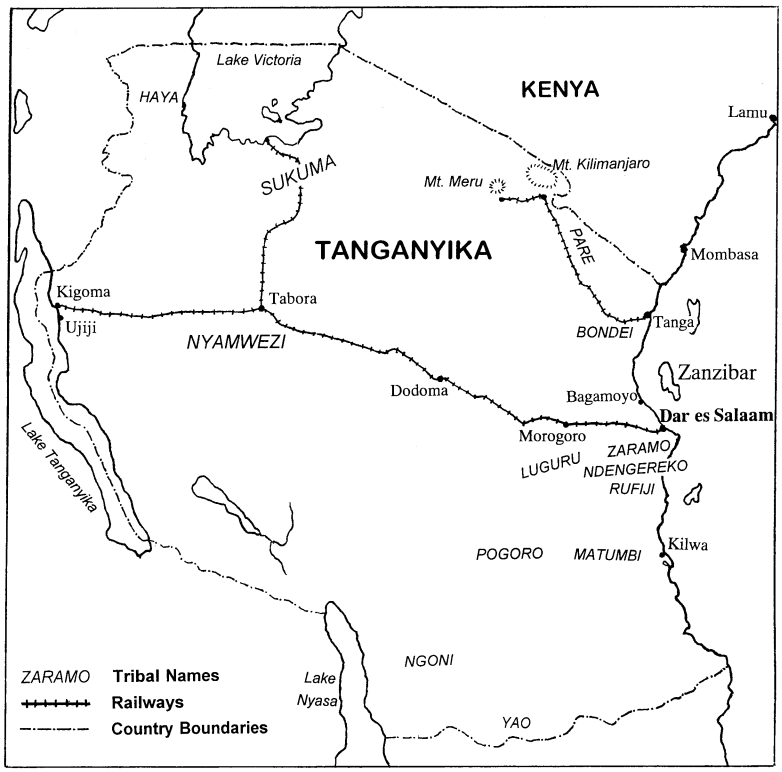

図1　タンガニーカの都市部と諸部族

表1　ダルエスサラームの人種別人口の推移

［単位：人，（ ）内は%］

Year	Africans	Asians	Europeans	Others	Total
1894	9,000 (90.0)	620 (6.2)	400 (4.0)	—	10,000
1900	18,000 (90.0)	1,480 (7.4)	360 (1.8)	—	20,000
1913	19,000 (84.4)	2,500 (11.1)	1,000 (4.4)	—	22,500
1921	20,000 (81.3)	4,000 (16.3)	600 (2.4)	—	24,600
1931	24,000 (70.0)	9,000 (26.2)	1,330 (3.9)	—	34,300
1943	33,000 (73.2)	11,000 (24.4)	1,100 (2.4)	—	45,100
1948	50,765 (73.3)	16,270 (23.5)	1,726 (2.5)	466	69,227
1952	72,330 (72.9)	22,547 (22.7)	3,603 (3.6)	660	99,140
1957	93,363 (72.5)	29,986 (23.3)	4,479 (3.5)	914	128,742

［出典］Sutton 1970, p.19.

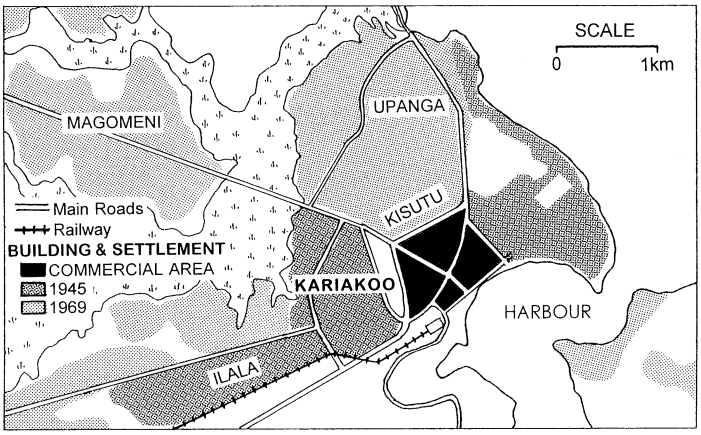

図 2　ダルエスサラーム中心部の発展
［出典］Sutton 1970, p.8 より筆者作成。

土地を借り，自ら泥壁の 1 階家を建てた。1920年代を通してカリアコーは中核的なアフリカ人街となり，30年代には新しい郊外がカリアコーの南西部イララ Ilala に建設される（Iliffe 1979, pp.384–385）。図 2 からわかるように，40年代半ばまでは，アフリカ人居住区はカリアコーとイララの両地区にほぼ限定されていた。

植民地下のダルエスサラームには，アフリカ系住民以外にも，常に一定程度のヨーロッパ系住民とインド系やアラブ系から成るアジア系商業民が，基本的に空間的に住み分けながら居住してきた。初期においてはこれらのアジア系住民は，商業地区（図 2 参照）に各集団の信仰毎に寺院やコミュニティーを作って集住していたが，表 1 にあるようにその人口は英国統治時代を通して徐々に増加し，次第にカリアコー地区などアフリカ人居住区においても多数混住するようになった。特にアラブ系住民と沿岸部出身のアフリカ系イスラーム教徒の関係は近く，通婚も盛んに行われてきた。

(2) ダルエスサラームにおける初期のアフリカ系住民社会の諸特質

上記の成立経緯から明らかなように，ダルエスサラームのアフリカ系住民社会は，ラム，モンバサ，ザンジバル等の他の東アフリカ沿岸部にある古くからのスワヒリ都市におけるそれとはかなり性格を異にしている。ダルエスサラームの初期のアフリカ系定住民は，東アフリカ沿岸部の伝統的都市民たるスワヒリ[6]よりも，むしろ元傭兵のスーダン人や元奴隷の Manyema[7] などの外部から来た最初の永住者や，もともとダルエスサラーム及びその周辺地域に住む Zaramo 族とその近縁の Shomvi 族等をはじめとするスワヒリ文化の影響の濃い地元住民が主体であった（Leslie 1963, p.20, 37）。最も初期からの住民である Manyema などが多くの不動産を所有し，影

6) スワヒリとは，そのもっとも狭い定義においては，東アフリカ沿岸部に古くから発達した交易都市に住むアラブ系やペルシャ系と混血した土着のバントゥー系アフリカ人で，スワヒリ語を母語としてイスラームを信仰し，都市的に洗練されたスワヒリ文化を身につけている人々を指す（日野 1980, pp.173–174）。

7) 奴隷として連れてこられた者を含む，旧ザイールのマニェマ地方から来た諸部族の総称。

響力のある家主 *fadha housi* として町のアフリカ人の中間層を形成した一方，本来の地元住民である Shomvi 族の多くは漁民のままに留まり，Zaramo 族は最下層を形成した（Iliffe 1979, pp.387–388）。

日野（1971, pp.142–143）は，1957年の段階で Zaramo 族（全アフリカ人人口の約3分の1），Rufiji 族，Luguru 族等の沿岸部のスワヒリ文化圏出身部族がダルエスサラームのアフリカ系住民の約7割を占め，これに Manyema，Nyamwezi 族，Yao 族などの内陸部出身でスワヒリ文化の影響が強い諸部族を加えると，同市のアフリカ人人口の85％がスワヒリ文化の受容者であると推定している[8]。これらスワヒリの影響の濃い初期住民に加えて，非熟練労働者として働く様々な部族からなる遠距離移住民や，政府職員などとして働く Haya 族や Bondei 族等の教育ある移住民などが次第に増え，50年代半ばにおいて，そこではタンガニーカ領内から67部族，領外からのものを合わせると大小取り混ぜて100もの部族の存在が確認されている（Leslie 1967, p.32）。

ダルエスサラームには，特に遠距離から移住してきた諸部族のための，おもに葬式における相互扶助を目的とした同部族あるいは同郷出身者のための互助組織が1910年代から存在していた。例えば36年には遠距離移住民の Nyamwezi 族による The New Wanyamwezi Association Dar es Salaam が創立されている。また，30年代の終わりに Manyema の18部族によって設立されたCongo Union Association のように，一定の広い地域から来た異なる部族から成る団体も存在した（Iliffe 1979, pp.389–390）。部族の互助組織のなかでも大規模のものは，特に農村部における部族の発展を目指して1938年に Zaramo 族により結成された Uzaramo Union（あるいは Wazaramo Union）であるが，49年には内紛と資金不足のため組織は解散する（Mwaruka 1965, p.118）。50年代半ばの時点で，未だに51もの部族組織が政府に登録されていたとはいえ，この頃までに，上記の Wanyamwezi Association のような大規模の部族組織は，都市の急激な成長の中で維持できずに解体した（Iliffe 1979, pp.390–391）。

Leslie（1967, pp.37–39）の50年代半ばにおける観察によれば，ダルエスサラームにおける諸部族の団結性は，その在住人口の多寡によって大いに異なり，少数集団ほど強い団結性を示す傾向がある。しかし全体的にみると，部族の個人に対する影響力は，町の規模の拡大，異部族の混住，世代交代，町での生活様式の多様化などが進むに連れて，明らかに薄れつつある。かかる部族組織の他に，当時のダルエスサラームにおいてはむしろ，Tripp（1992, pp.223–226）が指摘するように，宗教団体，娯楽結社（本稿でいうところの遊びの組織），労働組合，同業者組合，福祉団体的政治組織などの自発的に形成された様々な組織 voluntary associations が，互助組織として都市民の，特に新規移住民の社会的要請に応えてきたのである。

以上のように独立前のダルエスサラームのアフリカ系住民社会は，当初からアラブ系を含む様々な部族から成る移住民によって構成されており，それらの移住民は多くの場合出身部族への帰属意識をある程度保持しながらも，スワヒリ語とスワヒリ文化という共通項とその上に展開された様々な任意団体によって，ゆるやかに排他的でない形で結ばれていたということができる。日野（1980, pp.191–193）が指摘するように，古いアラブ系の交易都市のなかで形成されてきたスワヒリ文化の排他的アイデンティーをある程度保持しているラム等と違って，様々な移住民からなる

8) かかるスワヒリ文化の影響を反映し，ダルエスサラームの同時期の人口の約65％がイスラーム教徒といわれる（日野 1971, p.142）。

植民地下の近代都市として成立したダルエスサラームにおけるスワヒリ認識はより柔軟であり，そこでは出自の如何に関わらず，スワヒリ語を身につけて先住民の築いた都市文化に適応した者がスワヒリとみなされる。また，以前から共通語として広範囲に使われていたスワヒリ語は，植民地政府当局によっても行政及び初等教育のための言語として一貫して奨励されてきた[9]。以上のような社会的状況は，スワヒリ語を媒介とした都市民の排他的でない共通文化が大いに発展する素地となったと考えられる。

次に，都市部における遊びの組織についての概観を，おもに1930年代以前に東アフリカ一帯に流行し，その後のタンガニーカにおける都市的あるいは国民的文化の形成の先駆けとなった *beni ngoma* というダンス形式について論ずることから始めたい。

3. タンガニーカ都市部における遊びの組織

(1) 遊びの組織の原型としての *beni ngoma*

音楽や踊りといえば伝統的な部族の *ngoma*[10] や悪魔払いのダンス以外のものがあまり存在しなかった東アフリカの住民世界に，最初にヨーロッパの影響をうけたダンスの広範かつ超部族的なムーヴメントが成立したのは，*beni ngoma* においてである[11]。脱部族的な性格を持つ *ngoma* はそれ以前にも行われていたが（Iliffe 1979, pp.237–239），タンガニーカ全土に流行したのは *beni ngoma* が最初であった。

beni ngoma は，1890年代に，当時ヨーロッパ勢力の進出を目の当たりにしつつあったケニア沿岸部の都市モンバサやラムの若いスワヒリ系住民が，都市社会における集団間のライバル関係を表現するための新たな手段として，英国海軍の軍楽隊（ブラス・バンド）と教練を模倣して創り出したパフォーマンスの様式である。彼らは，王を頂点に戴くヨーロッパの帝国軍隊式の階級で構成される組織を作り，制服を着用して，管楽器の伴奏のもとに歌いながらダンスや行進を行うことを通して，ライバル・グループとそのパフォーマンスを競いあったのである。*beni ngoma* という呼称が英語の band とスワヒリ語の *ngoma* の組み合わせであることからわかるように，それは表面的にはヨーロッパの軍楽隊と教練の模倣にはじまっているが，実質的には，それ以前から存在した *ngoma*（歌とダンス）を通した集団間の競合というスワヒリの都市社会の伝統の延長線上にあった。

タンガニーカ（当時ドイツ領東アフリカ）における *beni ngoma* は，ケニア沿岸部でそれが行われるようになってから間もなく，ケニアに近い沿岸の都市タンガを起点として，まずダルエスサラームを含む沿岸部の諸都市に広がった。その後タンガニーカは第一次大戦（1914–1919年）の勃発に伴って英独の戦場となり，英独双方の軍隊によって徴用され従軍したアフリカ人の兵士や運搬人夫によっても盛んに行われた *beni ngoma* は，戦争による人の移動も相俟って内陸部においても急速に広まった。タンガニーカの *beni ngoma* のグループは常に超部族的な組織構成をとり，またケニアにおける事例と同様に在来の伝統的なダンス結社の性格を反映して，どこでも上層民の Marini と下層民の Arinoti という 2 つのラ

9) Whiteley (1969, pp.62–64) によれば，50年代半ばのタンガニーカにはすでに40紙ものスワヒリ語による定期刊行物（その多くは政府発行のもの）が存在し，またスワヒリ語によるポピュラー音楽のレコードが40年代後半から出回っていた。

10) *ngoma* とは，東アフリカ一帯における太鼓と歌と踊りが組合わさった伝統的なパフォーマンスに対する一般的な名称。本来，祝い事や儀礼的な場などにおいておこなわれるものであるが，現在ではショー化したものも多数存在する。

11) 以下の *beni ngoma* に関する記述は，すべて Ranger (1975) に依拠している。

イバル・グループに別れ，競争的なダンス合戦を行うようになった。1919年の大戦終了時までに，Marini と Arinoti はタンガニーカのすべての主要な都市で活動を行っており，それらは全国的な支部間のネットワークによって結ばれていた。

こうして *beni ngoma* は，タンガニーカの各地域社会，特に都市部における新しい集団的なダンス・娯楽の形式として普及すると同時に，部族的文脈を離れた異なる社会集団あるいは階層間のライバル関係の表現手段となった。当時 *beni ngoma* 組織の隆盛を中心となって推進したアフリカ人官吏，元兵士や警察官達は，それを内規とメンバーシップ制を持つある程度オフィシャルな組織に仕立てあげると同時に，各都市の支部間のネットワーク作りに力を入れ，支部と支部の間には相互訪問をして訪問地でのダンスに加わるなどの交流関係を持った。特に若いアフリカ人官吏にとっての *beni ngoma* とは，各地域社会における組織とその外へ広がるネットワークを通して信望を獲得し，広い範囲で政治的影響力を行使する手段でもあったのである。また各組織は，メンバー間の互助組織的性格をもあわせ持っていた他，女性や年少者によるサブ・セクションを有する場合もあった。

beni ngoma における歌の歌詞には，どこでも常にスワヒリ語が使われた。歌詞の内容の多くは時事的なもので，特にライバル集団に対するからかいや中傷，あるいは自分の属する集団への賛美などが多く歌われた他，戦争に伴う社会的混乱や白人支配者に対する恐怖や憎悪を表現したもの等，社会状況に対する風刺的な歌も存在した。*beni ngoma* は，自らの周囲をとりまく社会的状況，特に新たに出現した都市的な社会状況を表現するための手段でもあったといえる。

第一次大戦終結直後のタンガニーカの *beni ngoma* 組織は，英国の支配が確立した後も，しばらくの間ドイツ式の階級組織と，旧支配者ドイツに対する忠誠の気分とを残していた。その全国的なネットワークの有する少なからぬ政治的影響力に留意した英国植民地政府当局は，それが反英政治運動などにつながる可能性があるとみて，当初から *beni ngoma* を常に警戒していた。そのような状況下で，*beni ngoma* のムーヴメントに当初から深く関与していたアフリカ人官吏は次第に身を引くようになり，それは1920年代におけるアフリカ人の官吏組合やその後の African Association の成立（後述）と軌を一にしていた。かかる新しいアフリカ人による政治団体は，互助組織あるいは政治的影響力の行使の手段としての *beni ngoma* の代替物として，若い官吏の政治的欲求を満足させたのである。そのうえ，余暇の気晴らしとしては，サッカーなどの新しいタイプの娯楽が登場していた。同時に，都市の新しいアフリカ人エリートや政治的指導者たちには，Marini と Arinoti というダンス団体間の競争に多大な金とエネルギーを浪費することが，単に意味がないだけでなく，アフリカ人全体の団結に有害であるようにみえてきたのである。

上記のようなエリートの脱退後も，ダルエスサラームでの *beni ngoma* は新たに移住してきた労働者によって続けられ，それは都市に知り合いの少ない新規移住民に対してある種のコミュニティー的基盤を提供した。一方，タンガニーカの内陸部の多くの都市においては，*beni ngoma* は1930年代までには廃れてしまい，ダルエスサラームにおけるそれも，遅くとも50年代後半には消滅していた。

以上からわかるように，*beni ngoma* は単なるダンスの一形式であるにとどまらず，それが特に都市部において広い範囲で超部族的な社会編成を引き起こしたことから，しばしば政治的な性格を帯びた。それは一方で伝統的なダンス結社の性格を引き継いで地域社会の内部ではライバル間の競争を行い，他方でその外部に対しては時事的な批判を表現した。*beni ngoma* の社会的な性格と集団編成の形式は，その超部族的組織構成とスワヒリ語の使

用，役職を伴うヒエラルキーと明確なメンバーシップとを有する近代的な組織制，全国に広がる支部のネットワーク，女性や年少者によるサブ・セクションの存在等の点において，音楽クラブやスポーツ・チームなど後の遊びの組織の編成様式に受け継がれたのみならず，後の政治組織とも類似している点に注目したい。後に詳しく述べるように，*beni ngoma* のダンス結社は，その後のタンガニーカのアフリカ系都市住民による遊びや政治の組織の基本的な編成様式の原型を作ったのだと考えられる。

(2) *beni ngoma* 以降の主要な遊びの組織

上記のように，一度はタンガニーカの隅々にまで広がった *beni ngoma* は，1930年代には時代遅れとなってしまった。その代わりに *beni ngoma* と同様にモンバサからタンガを経由しダルエスサラームに30年代初頭に入ってきたヨーロッパ風の社交ダンス *dansi* が流行し，カリアコー地区東端の New street（現 Lumumba street，図3）などで盛んに行われるようになった。*dansi* は，*beni ngoma* と同様にダンス・クラブの地方都市の支部を通じて30年代後半から40年代にかけてポピュラーになった（Iliffe 1979, p.392）。

同じ頃タンガニーカの都市部では，南アフリカやラテンアメリカのポピュラー音楽などの外国の商業音楽が，レコードなどの形をとって入ってくるようになる。カリアコーでは，かかる外国音楽の影響を受けたアフリカ人によるダンス・バンドが1930年代から存在しはじめた。当初は手製の楽器を主体とした素朴なスタイルの楽団が多かったが，50年代後半より電気楽器を使用した本格的なバンドがいくつも登場する。ここでいうダンス・バンドとは，東アフリカや旧ザイールでは一般に Jazz Band と称され，通常，1920年代よりキューバで発達したポピュラー音楽ソン *son*（世界的にはルンバ *rumba* の名で知られる）の影響下に主として旧ザイールで独自の発達

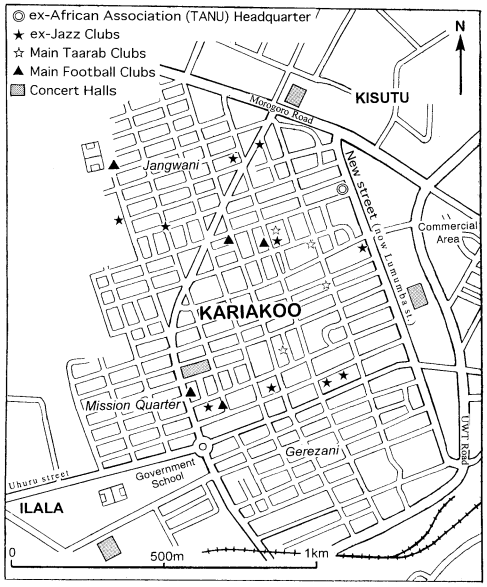

図3 カリアコー地区における遊びのクラブ等

を遂げたギター中心のダンス音楽（ザイール系ルンバ）を演奏するバンドのことである。旧ザイールと同様に，タンガニーカにおいても40-50年代はキューバ音楽のコピー・バンドが主体であったが，一般に60年代以降は常に同時代のザイール音楽の影響下にあった。

一方ザンジバル島においては1900年代からスルタンの宮廷楽団という形で，ターラブ *taarab* と呼ばれる音楽のグループが存在し，海峡一つ超えたダルエスサラームではカリアコー周辺において，1930年代よりザンジバルからの移住民やアラブ系住民を中心にターラブのグループが結成され活動を始めている。ターラブは，アラブ近代音楽の影響を色濃く受けた東アフリカ沿岸部に広がるポピュラー音楽の総称である。ザンジバルが発祥の地といわれているが（Khatib 1992, pp.1-7），現在では東アフリカ沿岸部諸都市をはじめ，タンザニア内陸部の諸都市においても広く分布している。音楽の様式には，近代エジプトのオーケストラ・スタイルを受け継ぐ正統派から，

地元の伝統的な *ngoma* や，インド音楽やキューバ音楽等外来のポピュラー音楽の影響を受けたものなど，多様なスタイルがある。使用楽器も初期の頃と現在では大きく様変わりしたが，変わらず重要なのはそのスワヒリ語の歌詞で，隠喩に満ちた押韻のある定型詩が特徴である。

このようにカリアコーは，1930–40年代以降はタンガニーカのアフリカ人社会における音楽文化の流行の最先端をいく地域となり，これらザイール系ルンバのダンス音楽とターラブが，現在に至るまでタンザニアのポピュラー音楽の2大ジャンルを形成している。ここで注意しておきたいのは，*beni ngoma* と同様に，これらポピュラー音楽における使用言語も圧倒的にスワヒリ語であるということである[12]。また後に述べるように，これらポピュラー音楽のグループはほとんど常に超部族的な組織構成をとってきた。

ポピュラー音楽以外にも，部族的あるいは脱部族的であるが伝統色の濃い *ngoma* のグループも依然として存在してきた。例えばZaramo族による *mtondoo* や *tokomile* というのは部族的な *ngoma* の例であるが，Iliffe (1979, p.391) によれば，かかる部族的な *ngoma* のグループは50年代半ばには少数派となっていた。むしろ40–50年代には *lelemama* という形式を結婚式等で演ずる（離婚者や未亡人を含む）既婚女性による脱部族的 *ngoma* のグループが盛んであり，ダルエスサラームでは Safina や Submarine，British Empire 等と称するグループが互いにライバル関係にあり，しばしばその衣装や歌などを競い合った。それら女性の *ngoma* のグループはまったく超部族的であり，歌詞にはスワヒリ語を使っていたという点で，ポピュラー音楽と同様きわめて都市的な性格を持っていた。

サッカーは，植民地期から現在まで，スポーツの他の分野を抑えて，東アフリカの住民に圧倒的な人気を誇ってきた。Iliffe (1979, p.393) によれば，タンガニーカにおいては，1884年に英国のキリスト教ミッションによる最初のサッカーの試合の記録があり，その後英領ザンジバルのミッション・スクールから来た若者によって1920年代に広められた。当初は政府部局や公社など公的機関によるチームが主流であったが，次第に住民自身によるストリート・チームが台頭してくるようになる。1955年時点でダルエスサラームのリーグには38のクラブが登録されており，そのメンバー構成は部族，職場，階層など町の社会構造を反映していた (*ibid.*, p.393)。

これら遊びの組織，なかでも庶民によるストリート・バンドやストリート・チームは，通例 *chama* という形態をとる。*chama* とはここでは，一定の目的を目指す，対等な関係にある者どうしによって人工的に形成された集団一般を指す。それは英語の club とほぼ似た意味をもつが，より公的な体裁を装っているというニュアンスが強く，それには政党や組合などあらゆる人工的組織が含まれる[13]。政治的な *chama* はもちろんのこと，遊びの *chama* においても，通常その大小に関わらず，先に *beni ngoma* のところで触れたような近代的な組織制がとられている。すなわち多くの場合明確な内規 *katiba* を持ち，クラブ・メンバー *wanachama* の投票によって選出されてクラブの運営に責任を負うところのチェアマン，会計，書記などの役職を伴う体制を有する。これら運営委員とクラブ・メンバーの多数を占めるのは，通常，ミュージシャンや選手以外の者である。クラブ・メンバーからは，入

12) ただし伝統的なターラブにおいては，アラビア語の語彙が多用される事も多かった。

13) *chama* はもともと秘密結社や呪術師の集会等を意味していたが (Iliffe 1979, p.497)，次第に近代的な人工的組織一般を指すようになってきたものと考えられる。ただし場所や時代によっては，人工的な任意団体とは必ずしもいえない部族そのものや宗教集団そのものを指す場合もある (和崎 1966, pp.559–560)。

会金と月々あるいは年毎の会費を徴収し，それをクラブの運営基金とする。また結成後は，役所に届け出て正式に登録するという手順を踏む場合が多い。

以下，カリアコー地区におけるこれらポピュラー音楽とサッカーのクラブのたどってきた歴史について，詳しくみていこう。

4. カリアコーにおける音楽クラブの発展

(1) ターラブ・クラブの発展

ここではダルエスサラームで最も古いターラブの2大名門グループである Egyptian Musical Club と Alwatan Musical Club について概観する。

ザンジバルで1905年頃に結成された最古のターラブ楽団 Nadi Akhwan Safaa のメンバーであったアラブ系の Salum Saidi Nahna は，1915年頃ダルエスサラームにやって来て，3人から成る小さなアラブ音楽のバンドを結成した。Salum とアフリカ人の妻との間に生まれた2人の息子が中心となり，エジプトからきた靴職人のアラブ人 Norman Simon を音楽的なリーダーとして1930年頃に結成されたのが，Egyptian Musical Club（以下 Egyptian と略記）である。Norman はクラブで，中近東の弦楽器ウードとヴァイオリンの弾き方や，アラビア語による歌い方を教えた。当初クラブはカリアコーに隣接する Kisutu 地区にあったが，のちにカリアコーの New street へ移動する。Egyptian 結成3年後の1933年，クラブ内部の主導権争いから創設者の一部が脱退して，アラビア語で「町の連中」という意味を持つ Alwatan Musical Club（以下 Alwatan と略記）を結成し，カリアコー北西部 Jangwani（図3）にクラブをもった。こうしてターラブは次第に町の結婚式における余興として定着していった。最初は楽器の種類が少なかった両グループも，ウードやヴァイオリンに加えてアコーデオン，ハルモニ，ガヌーン，大正琴などの諸楽器[14]を導入していき，50年代には多人数のオーケストラを擁するようになっていた。50年頃まではダルエスサラームにターラブ楽団はこの2つしかなく，どちらも引く手あまたで，多いときは週に2～3回も結婚式に呼ばれることがあった。

Egyptian の初期のメンバーには，Zaramo 族や Shomvi 族などをはじめとする，スワヒリの影響濃いダルエスサラーム及びその周辺部の沿岸諸部族が多く，一方で初期の Alwatan はかかる沿岸のスワヒリ諸部族の他に，アラブ系（その多くはアフリカ人との混血）のメンバーを比較的多く有していた。どちらのグループも学歴の比較的高い政府官吏や教師らとともに，魚売りや運転手など教育程度の低いメンバーをも有しており，様々な職業・社会階層の者によって構成されていた。Egyptian も Alwatan も特定の個人によって所有されない *chama* の形態をとり，基本的にミュージシャン以外のクラブ・メンバーの献金と結婚式での収入によって運営されていた。ミュージシャンの多くは音楽以外に自分の仕事をもっており，音楽活動は生計を立てるための手段ではなく，基本的に趣味の活動として行われていた。

当時の Egyptian は Nadi Mashumu，Alwatan は Nadi Akhwan Safaa というザンジバルにあるターラブ楽団とそれぞれ友人関係にあり，後述のようにイースター休暇の際等に，お互いを訪問しあうというような交流関係を保っていた。また Egyptian は Saniyatil Houb，Alwatan は Good Luck というダルエスサラームの女性の *ngoma* のグループとそれぞれ連携関係にあり，彼女達が結婚式で *ngoma* を歌い

14) ハルモニ（ハーモニアム）は19世紀にヨーロッパで生まれた小型のリードオルガン。ガヌーンはアラブの古典音楽で使われる箱ツィター型の撥弦楽器。大正琴は，大正初期に日本人の月琴奏者によって発明された弦楽器で，のちにインドなどで定着した。

演ずる際には，友人のターラブ・クラブの楽隊が伴奏に協力した。Egyptian と Alwatan の間には表だった競合関係はなかったが，この2つの女性 *ngoma* グループは，歌によって互いに相手を露骨に中傷しあうなど，明白なライバル関係にあった。また Alwatan は，Young Stars と称する年少者によるジュニア部門を有していた。

(2) ジャズ・バンドの発展

ダルエスサラームには，最も古い時代に成立し，最も長く人気を保った Dar es Salaam Jazz Band のように，1930年代からすでにダンス・バンドが存在した。が，本格的に盛んになったのは，第二次世界大戦に兵士として従軍し，外国の音楽に触れてその知識をもって復員してきた多数のミュージシャンが現れた40年代後半以降のことである（Martin 1980, p.52）。50年代から60年代にかけては，近郊の町バガモヨの Lucky Star Jazz Band がダルエスサラームで人気を博した他，カリアコー地区に Ulanga Jazz Band，Rufiji Jazz Band，Cuban Branch など，隣接するイララ地区に Skokian Jazz Band などのジャズ・バンドが成立した。以下，Dar es Salaam Jazz Band を中心にみてみよう。

1930年代の前半よりダルエスサラームではじめて活動を開始したダンス・バンドは，当時カリアコーに成立したばかりのアフリカ人の政治団体 African Association（後述）にちなんで African Association Jazz Band と呼ばれ，当時2ヶ所しかなかった町のホールで演奏していた。その主要メンバーが脱退し，1935年頃に結成したのが Dar es Salaam Jazz Band である。60年前後にエレキギターなどの電気楽器やサックス等を導入するまでは，基本的にアコースティック・ギター，マンドリン，ヴァイオリン，バンジョーなどの弦楽器と，牛や羊の皮をはった伝統太鼓や拍子木などのリズム楽器という編成を有していた。

Dar es Salaam Jazz Band の草創期のメンバーは，様々な部族，職業，学歴の者から成っていた。それはいわば町での知り合いによるグループであり，部族を超えたダルエスサラーム市民のバンドを標榜していた。バンドは表向き民主的な *chama* の形をとっていたが，実質的には創始者の1人であるヴァイオリニストのもので，カリアコーにあった彼の家をクラブ・ハウスとしていた。60年代当時で10名前後のミュージシャンを抱え，それ以外に30名ほどのクラブ・メンバーを有していた。当時のミュージシャンの多くは音楽以外の仕事を持っており，バンド活動を生業の手段として行っていたわけではなかった。金銭的報酬よりも重要なことは，自分の技量を磨き，名声や恋人をえることだったのである。入会金を支払って加入したクラブ・メンバーの多くはカリアコーに住み，クラブに対して月々一定額の会費を支払うかわりに，週末にホールで行う公演には無料で入場することができた。

カリアコーの Ulanga Jazz Band はカリアコーに住むUlanga地方出身の Pogoro 族を中心に，イララの Skokian Jazz Band は同じ職場で働く者を中心に部族も学歴も様々な仲間によって，それぞれ50年代の半ばに結成された。同じ頃，カリアコーに住みダルエスサラーム港の税関で働く Rufiji 地方出身の4人の Ndengereko 族によって Rufiji Jazz Band が設立される。楽器は創設者や同郷のメンバーが献金して資金を集めて購入し，結成後しばらくしてカリアコーの Rufiji street に部屋を借りてクラブ・ハウスとした。当初は Ndengereko 族が主体であったものの，徐々にそれ以外のメンバーも加入してきた。

60年代に Dar es Salaam Jazz Band とともに人気を博したダルエスサラームのジャズ・バンドは，1959年に相次いでカリアコーで設立された Western Jazz Band と Kilwa Jazz Band である。Western Jazz Band は4名の Nyamwezi 族による出資に基づいて設立され，Nyamwezi 族の住む現在のタボラ州が当時の

植民地下の行政区域でWestern Provinceに属していたためこの名がつけられたが，加入者はNyamwezi族に限らなかった。バンド運営に関しては最初の出資者が最終的な決定権を握っていたとはいえ，形式上はクラブ・メンバーの合議制による*chama*という形をとっており，運営委員会の役職も年に1回の投票で決められた。一方のKilwa Jazz Bandは，キルワ出身のMatumbi族のミュージシャンたちを中心に結成されたが，しばらくするとキルワ出身者以外の者がクラブ・メンバーのほとんどを占めるようになった。これはWestern Jazz Bandと違って，当初からメンバーが互いに対等な*chama*であり，メンバー全員の協議によって事は決定された。クラブは60年代半ばにカリアコー北西部JangwaniのMadobiと呼ばれる大きな建物にうつり，そこを拠点として平日は楽器を練習し，週末はダンスホール兼バーを運営した。

当時は町の演奏場所が限られていたため，どのバンドが何曜日にどこで演奏するかはほとんど固定されており，ファンは皆承知していたので宣伝の必要がなかった。例えば上記60年代の3大バンドの週末の演奏場所は，Dar es Salaam Jazz Bandはカリアコーに隣接するTanzania Legion，Western Jazz BandはMagomeni地区（図2）のMagomeni Community Center，Kilwa Jazz Bandはクラブのある Madobiと決まっていた。また，これら3大バンドは互いにライバル関係にあり，それは時に歌による中傷合戦や，各バンドのファンどうしの喧嘩沙汰にまで発展することもあった。Dar es Salaam Jazz BandとバガモヨのLucky Star Jazz Bandも，同様なライバル関係にあった。

ダルエスサラームの一部のジャズ・バンドは，ザンジバルと特に結びつきが深かったターラブ・クラブとは異なり，モロゴロやタンガなど大陸部の地方都市のジャズ・バンドとも友人関係にあり，クリスマス休暇等にお互いを訪問しあうなどの交流関係を有していた。また，年少者によるジュニア部門も，Dar es Salaam Jazz B，Kilwa Jazz Bというような形で存在し，バンドが地方ツアーに出て町に不在の場合には，その代理として演奏することもあった。

(3) 音楽クラブの社会的特質

上記のように，ターラブの2つのグループEgyptian Musical ClubとAlwatan Musical Clubは，どちらも最初からカリアコーとその周辺のアラブ系住民及びZaramo族等のスワヒリ化した沿岸諸部族を中心にその活動が行われていた。ただ異なる点は，Alwatanのメンバーにはアラブ系（その多くはアフリカ人との混血）が比較的多く，アラブ系住民の支持をより多く受けていた点である。いずれにしろ，初期のターラブには，アラブ系を含めた沿岸部のスワヒリ系住民に特有の文化という排他的側面が多少ともあったと考えられる。しかしその構成員は，成立当初から，特定の人種や部族に限定されていたわけでは決してなかった。

ジャズ・バンドは，沿岸部出身者に限らず誰でも参加できるという点でターラブよりも一層開放的であった。とはいえ，50年代の多くのバンド結成にあたっては，スタート時は互いに信用できる同部族の者あるいは同郷出身者と組む傾向（Ulanga Jazz，Rufiji Jazz，Western Jazz，Kilwa Jazz）も根強くあった。しかしながら，最初から単なる友人関係に基づいて結成される場合（Dar es Salaam Jazz，Skokian Jazz）も少なくなく，またいずれの事例をみてもすぐに同部族的傾向は薄れて，興味をもつ町の住民なら誰でも参加できるようになる。また各バンドには入会金を支払って正式に入会したクラブ・メンバー以外に，毎週末同じバンドのホールに踊りにくるような固定したファンが多数ついており，バンドはすぐに狭い集団を超えて町の社会に広範に根をおろしていったのである。

当時のターラブ・クラブにおいてもジャズ

・バンドにおいても，基本的に社会的・経済的地位（職業や学歴）などの条件によってメンバーの加入が制限されることはなかった。最初の出資者等が他のメンバーよりも大きな影響力を発揮する場合が多かったとはいえ，表向きは，商人も，魚売りも，教師も，官吏も，運転手も，入会金を支払いメンバーシップを得ることによって，誰でも対等な資格でクラブに参加することができ，実際どのグループをみても多様な職業をもつ者から構成されていた。また，ミュージシャンにとって音楽は基本的に趣味の活動として行われており，アマチュア性が非常に高かった。

上述のように，ターラブ・クラブとジャズ・バンドは双方とも，多少の違いはあれメンバーシップ制に基づいた *chama* という組織編成をとっていたと同時に，*beni ngoma* と同様に他の地方都市のクラブとのネットワークや，女性や年少者によるサブ・グループをも有していた。このように音楽クラブを軸として，表面にあらわれているだけでも多様な人間関係が存在していたのである。またターラブとジャズにおける歌詞は，*beni ngoma* におけるそれと同様に，基本的にスワヒリ語による都市社会あるいは都市的生活の表現という性質を有している。特にジャズ・バンドは，Ranger（1975, pp.153-154）も指摘するように，近代主義的な青年たちによる時事性のある社会批判の表現メディアという，かつて *beni ngoma* が果たしていた社会的機能を明白に引き継いでいた。

beni ngoma のもうひとつの大きな特徴である集団間のライバル関係もまた，上述の音楽クラブの事例において確認することができた。それはしかし，次にみるサッカー・クラブの事例のように実際の町の社会の階層構造をはっきりと反映した形であらわれてくることはなかった。

5. カリアコーにおけるサッカー・クラブの発展

(1) ダルエスサラームにおける初期のサッカーの歴史

ダルエスサラームにおける最も古いサッカーの公式リーグは，おそらく1920年代初頭に成立した警察長官の英国人ブラウン氏主催の Brown Cup であり，これがのちの Dar es Salaam Football League の原型となったと思われる。その後，30年代から40年代にかけて，英国の民間人主催の Higgynson Cup，英国のタバコ会社主催の Pall Mall Cup 等のマッチが次々と成立した。また英国の石鹸会社主催の Sunlight Cup は，40年代初頭よりタンガニーカの8つの province 代表チームの対抗戦としての形を整えた。リーグ形式で何カ月かかけておこなう Dar es Salaam League を除き，他のすべては短期間のトーナメント方式であった。

30年代に上記公式リーグに参加していた初期のチームには，白人のスポーツ・クラブである Gymkhana Club のほか，白人とアフリカ人の混成である警察（Tanganyika Territorial Police）と軍隊（King's African Rifles）のチームがあった。この他，鉄道公社のTanganyika Railways Team，カリアコーの公立小学校の Government School Team など公的機関のチームが多数を占めていた一方で，町のアラブ系住民による Arab Sports やアフリカ系住民による New Strong Team などの民間チームも参加していた。

1939年よりはじまった第二次世界大戦の影響で軍隊や警察や白人のチームはほとんど活動を停止し，かわって40年代からはゴア人[15]による Goans Club，インド系の Khoja 派イスラーム教徒による Agha Khan Club，港湾労働者の Dock Yard Team などとともに，Young African Sports Club（通称 Yanga）や

15) インド南西部の旧ポルトガル領ゴア出身のインド系のキリスト教徒。

Sunderland[16] などのアフリカ人のストリート・チームが多く台頭してきた。Yanga のライバルだったスーダン系住民を主体としたチーム Sudanese は40年代半ばに解散し，選手の半分は Yanga へ，半分は Sunderland へ吸収された。こうして40年代後半から50年代にかけて，徐々に Yanga と Sunderland が他の追随を許さない2大チームとして台頭し，以後この2チームは激しいライバル争いを展開することになる。また50年代半ばに結成された Cosmopolitan Sports Club は，60年代に Yanga と Sunderland に次ぐチームとして活躍した。次に，当時カリアコーに存在した3大クラブ・チーム，Yanga，Sunderland 及び Cosmopolitan の成立事情について，詳しくみてみよう。

(2) カリアコーの3大サッカー・クラブの成立とその社会的特質

カリアコーの Zaramo 族が主体のチーム New Young の選手が中心となり，他のチームの選手を加えて1939年頃に結成されたのが，Young African Sports Club (Yanga) である。40年前後からダルエスサラームの一部リーグに参加し，42年にはリーグ及びすべてのトーナメントで優勝した。Yanga の初期のメンバーや支持者には，カリアコー北西部 Jangwani（図3）に住む Zaramo 族や Ndengereko 族ら地元周辺出身の部族が多く，小さな商売や魚売りなどを生業とするものが多かった。また前出の Zaramo 族の部族組織 Uzaramo Union の指導者は初期の Yanga と深い関係をもち，一時期 Yanga は Union の指導者の家を借りてクラブ・ハウスとしており，そこで Union の会合が開かれることもあった。

Sunderland は，同じ1939年頃に，カリアコーの公立小学校卒業者の選手を中心に結成される。Yanga に少し遅れてダルエスサラーム・リーグに参加し，46年には行われたすべてのトーナメント及びリーグで優勝した。教育のない貧しい地元民の支持を集めた Yanga とは対照的に，もともと公立学校卒業者を主体としていた Sunderland の初期のメンバーや選手には，政府印刷所の職員，港湾会社の社員，教育省の官吏，裁判所の職員など教育ある市民が多く，特に他チームと比べアラブ系住民（多くはアフリカ人との混血）がめだち，多くの富裕なアラブ系商人のサポートを得た。

Cosmopolitan Sports Clubは1956年に，カリアコーに在住するザンジバルやモンバサ出身の教育あるアラブ系住民で，港の貨物会社で事務職をしていた人々を中心に設立された。メンバーは特にアラブ系のみに限られていたわけではなく，当初からすべての人種・部族に対して開かれており，後になると徐々にアラブ系の比重が減っていった。

音楽クラブと同様に，当時のサッカー・チームもメンバーシップと内規と役職を伴う *chama* の形態をとっていた。また選手にとっても選手以外のメンバーにとってもスポーツは職業ではなく，あくまで趣味の活動として行われていた。また，上にみたようにどのチームも成立当初は部族・人種や職場，学校等における人間関係を基礎に形成されているが，決して一義的に部族や社会階層を限定するような排他的なものではなかった。

しかしながら，ここで特筆すべきは，初期の Yanga と Sunderland が単に試合上のライバルであったのみならず，社会的にも上記のように異なった社会階層にある程度対応していたことである。Yanga の支持者は自身のチームが「地元民 *wenyeji*」のチームであることを誇りにし，「客人（移住民）*wageni*」のチームである Sunderland に対して対抗意識を

16) この名前は，当時強かった英国のチーム名をとってつけられた。なお Sunderland は，のちに Simba と改名して現在に至る。

燃やした。一方で Sunderland のファンは，Yanga の支持者のことを「教育程度の低い魚売りの連中」といってからかい，馬鹿にした。かかる「教育のない（貧乏な）地元民 *wenyeji*」と「教育のある（裕福な）移住民 *wageni*」という対立は，*beni ngoma* における下層民の Arinoti と上層民の Marini とのライバル関係にほぼ対応していると考えられる[17]。

こうしたサッカーを通したライバル関係の表現は，50年代末にはタンガニーカ沿岸部の諸地域にも広がっており，そこでは各チームにダルエスサラームと同じ Yanga と Sunderland という名前がつけられている（Lienhardt 1968, pp.16–17）。沿岸部のみならず，当時のモロゴロ等内陸の地方都市においても両チームの支部的な性格を持つ2チームが存在し[18]，同様なライバル関係にあった。また当時の Yanga は African Boys，Sunderland は Morning Star 及び Lancaster と称するジュニア・チームを有していた。激しいライバル意識と競争という点と同時に，かかる地方都市とのネットワークと年少者によるジュニア・チームの存在などの点においても，サッカー・クラブは音楽クラブよりも一層明白に *beni ngoma* の伝統をひいているといえる。しかしながら，このような実際の町の社会階層・集団を反映したライバル関係は，町の規模やチーム組織の拡大とともに次第に薄れてゆき，次にみるように，ある時期からはクラブ・ハウスの位置と居住地との遠近といったより形式的な区分が採用されるようになっていった。

(3) サッカー・チームと音楽クラブとの交流関係

音楽グループとサッカー・チームとの密接な関係は，それらが出現しはじめた当初から，ダンス結社のそれぞれが自身のサッカー・チームをもっていた（Ranger 1975, p.99）というような形で存したと考えられる。1930年代以降のダルエスサラームにおいても，一部のミュージシャンがサッカー選手でもあったという関係はもとより，多くの音楽クラブとサッカー・チームが組織どうしの連携関係にあった。それがもっともよくあらわれるのが，以下に述べる年に一度のスポーツ交流会においてである。

イースター休暇 *pasaka* には，英国統治時代から，ダルエスサラームとザンジバルの間でスポーツ交流会が毎年行われていた。それは各年おきに両地で交互に開催され，それぞれの地域のスポーツ愛好家が人種を問わず参加した。そこではサッカーをはじめ，クリケット，ホッケー，テニスなどの試合が行われ，夜にはターラブの演奏がつきものであった。ダルエスサラームの各サッカー・チームはそれぞれ地元のターラブ・クラブ及びザンジバルの特定のチームと友人関係にあり，イースターには行動をともにした。例えば Sunderland はザンジバルの Kikwajuni Sports Club というチームと友人関係にあり，ザンジバルに行く時にはそのクラブの招待を受けて世話になる。その際，Sunderland の友人であるターラブ・クラブの Alwatan Musical Club も同行し，そのザンジバル側の友人である Nadi Akhwan Safaa のクラブに寝泊まりするのである。Alwatan のメンバーは昼間は Sunderland の試合を観戦し，夜は選手を呼んでターラブの演奏会を開いた。Yanga と Egyptian Musical Club も，これと同様の関係にあった。

17) ただし *beni ngoma* の結社の事例においては，「教育のある者とない者」あるいは「富める者と貧しい者」という上層民と下層民の対立関係は，必ずしも「移住民と地元民」という区別に対応しているわけではない（Ranger 1975, pp.53–55, 64–65）。

18) 他の地域については定かではないが，モロゴロの事例においては，政府官吏等の教育ある移住民のチーム Sunderland と，学歴の低い地元民のチーム Yanga とのライバル関係という，ダルエスサラームと同じ構図をとっていた。

このようなターラブ・クラブとサッカー・チームとの友人関係の成立は，初期の段階において Egyptian と Yanga はどちらも Zaramo 族のコミュニティーを，Alwatan と Sunderland はどちらもアラブ系住民のコミュニティーを支持基盤のひとつとしていた，という点と関わっていると思われる。しかし，次にみる60年代以降におけるジャズ・バンドとサッカー・チームの友好協力関係は，おそらく，お互いのクラブが近いというような，より形式的な理由に依っていた。

Sunderland の友人は当時クラブが近くにあった Dar es Salaam Jazz Bandであり，Yanga のそれはやはり近所の Western Jazz Band であった。両バンドは，それぞれ贔屓のチームが重要な試合で勝ったときには，入場料無料で公演を行い，またチームは優勝パーティなどの際に，それぞれ自分の友人のバンドを呼んでダンス・パーティを行った。Dar es Salaam Jazz Band は，Sunderland の資金難を救うために，資金集めのためのコンサートを開いたこともある。また Yanga がザンジバルの友人のチームを招待する時，その客の一部は，友人である Western Jazz Band や Egyptian のクラブにも寝泊まりし，またホールでバンドの演奏をきいて楽しむこともあった。

サッカー・チームが音楽クラブと交流関係を持つだけでなく，チーム自身がバンドを持つ場合もあった。たとえば Sunderland は，長続きしなかったとはいえ，1940年代後半に Sunderland Jazz Band という専属バンドをもち，選手の一部はミュージシャンでもあった。また，40年代にカリアコーの Mission Quarter（図３）に存在した Mission Quarter Jazz Band のミュージシャンの一部は，40年代から50年代にかけて同地域でカトリック教会の神父の後援を受けて長続きしたチーム Quarter Family の選手でもあり，両団体は深い関係にあった。

次に，ダルエスサラームにおける政治運動の発展過程と，その遊びの組織との関係を検討したい。

6. ダルエスサラームにおける政治運動の発展

(1) アフリカ系住民による政治団体 African Association の成立とその社会的特質

タンガニーカにおいては，1961年の独立時から1977年に至るまで，独立運動以来国民の圧倒的支持を受けてきた政党 TANU（Tanganyika African National Union）による一党制がしかれていた。TANU は独立前の54年に，既存のアフリカ人による全国的な政治組織 Tanganyika African Association（TAA）が，独立という明確な目的をもって改編されたものである。その TAA の源流をたどると，1922年にタンガのアフリカ人政府官吏らにより結成された Tanganyika Territory African Civil Services Association（TTACSA）に行き着く。

TTACSA は部分的にはささやかな官吏の組合で，部分的には社交クラブであった。最初の１年で49名のメンバーが集まり，サッカー・チームを組織したり，クラブ・ハウスを建てるために資金集めを行ったり，英語や地理学等を教える夜間教室を開くなどの活動[19]を行っていた（Iliffe 1973, p.73）。ダルエスサラームには，1925年に TTACSA の支部

19) このような活動形態は，当時のアフリカ人エリートの社交的あるいは互助的団体として典型的なものであったと思われる。例えば，1935年に北パレ地方の Usangi で事務員，教師，商売人等の若い近代主義者達により結成された福祉団体 Usangi Sports and Welfare Club においても同様に，クラブ・ハウスを建て，サッカー・チームを運営し，集まって議論し，地方政府に意見をするなどの活動が行われていた。首都にある AA の存在を知った彼らは，46年に実質的にその支部となる（Iliffe 1968, p.21）。

が作られた。その支部自体は28年に消滅したが，そのメンバーの多くは，当時すでに存在したヨーロッパ系住民の European Association やインド系住民の Indian Association をモデルとして29年に設立された African Association（スワヒリ名 *Chama cha Umoja wa Watu wa Africa*「アフリカ人統一（団結）協会」，以下 AA と略記）に移動し，その中核となる（Iliffe 1968, p.3）。

AA 設立の目的は，そのスワヒリ名が示すように，それがアフリカ人の唯一の代表として「タンガニーカのみならず，アフリカ全体において，アフリカ人の利益を守る」という汎アフリカニズムの色彩が濃い漠然としたものであり，部族，宗教，出身地に係わらず，アフリカ人なら誰でもメンバーになることができた。その初期の主要な構成員には，初代プレジデント Cecil Matola をはじめとするキリスト教ミッションで教育を受けた植民地政府の英語を話すスタッフのほか，町の社会により深い根をもつドイツ統治時代からの首都官吏 Zibe Kidasi 等や，元傭兵の息子 Kleist Sykes，Zaramo 族の有力者 Ramadhani Ali，Manyema の有力者 Mzee Sudi などの町の古い集団の指導者が含まれていた。つまり TTACSA とちがって，AA は官吏以外の他の社会集団の指導者との連合を目指し，より広く町の社会全体に依拠しようとしていたのである（Iliffe 1979, pp.406–408）。

AA は31年3月までに300人のメンバーを集め，カリアコー東部の New street にクラブ・ハウスを建設しはじめた（図3参照）[20]。ここまでみてきたような遊びの組織とは異なり，初期の AA のメンバーは教育程度の高いエリート層が中心で，彼らは高い入会金と年会費を支払い，それが組織の活動資金となった。地方都市における支部結成も奨励され，30年代だけでも10ヶ所の支部が作られ，48年には全国に39の支部と1,780名のメンバーを数えるようになる。地方支部は各地にあった白人の European Club のカウンターパートともなり，図書館を開いたり，茶会やパーティを催すなどの活動を行っていた（Iliffe 1979, pp.408–409, p.426）。そのため当時の政府は，AA は政治組織というよりもむしろ社交団体であると認識していた（Bienen 1970, p.23）。

TTACSA や AA などの政治的性格を持つ団体の成立と同時に，官吏が Marini や Arinoti など *beni ngoma* の団体から身をひいたことは前に述べたが，AA の初期の指導的メンバーとして上に名前を挙げた Zibe Kidasi，Ramadhani Ali，Kleist Sykes などは，ダルエスサラームの *beni ngoma* の組織において指導的地位にあり，かつ町の社会に大きな影響力を持っていた人物である（Ranger 1975, pp.94–95）[21]。また Iliffe（1979, p.409）は，初期の AA 本部における会計検査官，チーフ・アドヴァイザー，プレジデントのアシスタント等の組織構成が *beni ngoma* の組織に類似していた事を指摘している。このように AA は，Ranger（1975, p.95）がいうように様々な面で *beni ngoma* の人間関係と機能を引き継いでおり，その意味で *beni ngoma* の組織が発展した形であるとみることもできる。

また AA の全国支部がこれだけ速やかに広がっていったのは，すでに官吏が関与した形での *beni ngoma* や *dansi* の組織の全国的ネットワークという素地があったからだと考えられる。実際に初期の AA 支部とエリートのダンス・クラブは見分けがつかないことが多く（Ranger 1975, p.96; Iliffe 1979, p.413），30年代の支部形成においては，ダンス結社が媒介

20) 当時のカリアコー東部には教育程度や政治意識の高い人々が多く住んでおり，AA がその本部をカリアコー最東部の New street においたのは，自然な成り行きであった（Iliffe 1979, p.387）。

21) この他に，AA と直接関連はないが，ダルエスサラームの Arinoti のリーダーであった New street の住人 Saleh bin Fundi は，1940年代半ばに町の労働運動の最初のリーダーとなっている（Iliffe 1979, pp.397–398）。

者としての役割を果たすことがあった（Iliffe 1979, p.414）。また AA 本部や支部間の相互訪問も行われ，メンバーは訪問先でまるでオフィシャルに地方を巡察する役人のように遇された（*ibid.*, p.409）。のちに TANU 本部が50年代半ばにその青年部門（TANU Youth League）と女性部門を作ったことや，TANU 支部の多くが Lady Chairman とその部下達を伴う女性セクションを有していた（*ibid.*, p. 531）ことも同様に，*beni ngoma* や他の遊びの組織との類縁関係を思い起こさせる。

Bienen（1970, pp.43-48）は，AA（あるいは TANU）は，新しい脱部族的な都市的生活様式を体現するスワヒリ文化の担い手として，各地方都市の様々な階層の人々にアピールしたのだと述べている。つまり，AA は単に（社交的なものを含む）実利的な意味のみならず，文化的な意味をも体現するものであったと考えられる。しかしその文化的意味は，Bienen のいうような「都市的生活様式としてのスワヒリ文化」のみを含むのではなく，ここまで述べてきたような，都市において *beni ngoma* 等の遊びの組織を形作ってきた別の文化の流れとも大いに関連があるように思われる。

(2) 地方の互助組織 AA から全国規模の大衆的政治組織 TANU へ

ダルエスサラームの AA 本部は，しかし単なる社交あるいは福祉的団体に終始していただけではなかった。それは首都におけるアフリカ人の裁判官 *kadhi* 導入を政府に嘆願したり，領土間の連合問題について政府の政策への賛意を正式に表明し，当該問題を調査するための議会の委員会にアフリカ人代表を送りこもうと試みるなど，政治的問題にも関わろうとしてきた。しかし AA が政治的問題に口出しすることに対し政府が難色を示したため，若い官吏の失業への恐怖が政治活動を畏縮させる結果となり，同時に多くの問題について見解を異にする官吏と古い町の集団の指導者たちとの対立が顕在化する。また，30年代半ばには，アジア系商人に対抗するためにアフリカ人による商人組合を設立したウガンダ出身の商人 Erica Fiah が，AA の乗っ取りをたくらんで両組織の融合を試みて挫折するなどの事件が，AA 本部の混乱と停滞に拍車をかけた（Iliffe 1979, pp.408-411）。このような党派性と絶え間ない内紛は町のアフリカ人を統一するにはほど遠く，汎アフリカニズムの理想の裏では，ダルエスサラームという狭い地域内においてエリートが個別の利害を主張しあっていたにすぎなかった。

このように政治的に停滞していたダルエスサラームの AA 本部は，1940年代半ばにおいてドドマやザンジバルなどの支部によって再活性化され，その過程で，次第に運動の領土的な広がりが意識されていくことになる。45年にドドマで開催された AA の全国会議においては，「AA を大衆的政治組織に改編する」「立法審議会やその他の政府の委員会にアフリカ人の代表を送る」などの当時としてはやや急進的な提議がなされ，それはメンバーの政治的覚醒を促した。また47年にザンジバルで開かれた全国会議においては，ダルエスサラームの本部とザンジバル支部が対立し，翌年本部はザンジバルとの直接的関係を絶ち，名称を Tanganyika African Association（TAA）に変更する（Iliffe 1979, pp.421-434）。

その頃，タンガニーカ全体では，反植民地主義的あるいは民族主義的な動きが急速に広まっていた。これには，第二次大戦後タンガニーカが国連の信託統治領となり，信託統治理事会が非植民地化に積極的な態度をとったことが大きく影響していた。47年には，ゼネストがダルエスサラームの港湾労働者にはじまり，全国各地の鉄道，プランテーション，鉱山にまで広がる。同じ頃，メルー山周辺やパレ地方などの北東部の農業先進地においては，政府による農業改革事業等に対する農民の抵抗運動が起こっていた。また50年代に入ると，綿花産業の発展によりアジア系商人と

アフリカ系商人の対立が激化していたヴィクトリア湖南岸の Sukuma 族地域の TAA 支部が，協同組合の組織を通して民族主義運動の高まりに大きく貢献する（Iliffe 1979, pp.490–507）。こうした動きのなかで，53年には英国留学の経験を持つ高校教師ニエレレ Julius K. Nyerere（後のタンガニーカ初代大統領）が TAA のプレジデントとなり，これを改組・改称して民族主義的かつ中央集権的な政治組織に発展させ，独立を勝ち取るまで戦いぬくことを決定し，翌54年にダルエスサラームにおいて TANU が発足した。こうして成立当初はダルエスサラームのアフリカ人エリートの互助団体の域を出なかった AA は，その地方支部や，都市の労働組合や地方の協同組合などによる反植民地政府運動をまきこんでいく過程で，民族の独立を明白な目的に掲げた大衆的全国組織 TANU に生まれ変わった。

この間植民地政府は，1956年に多人種協調政策を掲げる白人主導の政党 United Tanganyika Party（UTP）を結成させて TANU に対抗させるとともに，TANU や指導者ニエレレに対して様々な手段で圧力をかけてきた。53年から55年にかけて，政府は公務員が政党に入ることを禁じた他，政党の登録と党員リストの提出及び集会を開く際の許可取得等を義務づける法令を成立させるとともに，反政府的言説を取り締まるために刑法の改正を行い，また54年には Sukuma 族地域の TANU 支部の活動が禁止された（Coulson 1982, pp. 114–115; Iliffe 1979, p.514, 553）。また1957年初頭には，政府はニエレレが政治集会において演説をすることを禁止し，同時にいくつかの地方支部も閉鎖を命じられる。しかしまもなく国連のミッションが来ることが予定されていたため，これらの禁制は半年後には解かれることになる（Iliffe 1979, p.554）。その後，1958年以降2回にわたって行われた立法審議会の議員選挙は，いずれも TANU の地滑り的勝利に帰し，英国国内の政治状況の変化も手伝って，早くも1961年にタンガニーカは完全独立を達成した。

反植民地的政治運動という意味では常に他地域に遅れをとっていた首都ダルエスサラームでは，1950年代半ばよりそれまでになく大衆的な運動が高揚をみせるようになる。55年3月には国連の信託統治理事会訪問から帰国したばかりの党首ニエレレを迎えて，1万人規模の最初の大きな政治集会が開かれた。その時点でダルエスサラームにおける TANU 党員数は2,000人にすぎなかったのが，4ケ月後には5,000人に膨れ上がる。また55年9月までに全国で発行された党のメンバーシップ・カード40,000余枚のうち，25,000枚は当時人口10万人余りにすぎなかったダルエスサラーム向けのものであった。かかる急速な変化の背後には，大衆動員に力を入れた専任の TANU 書記長 Oscar Kambona の働きがあった（Iliffe 1979, pp.516–518）。特定の大きなスポンサーをほとんど持たなかった TANU には，少しでも多くの人を党員にし，メンバーシップ・カードと引き換えに入会金を徴収するというような地道な大衆動員的方法に頼る以外に，その資金を調達する方法がなかったのである。

かかるダルエスサラームでの成功は，その後 TANU がタンガニーカ全体を掌握するための重要な布石となる。地方的な政治対立や UTP 等反 TANU 勢力によってある程度その勢力の伸張を阻害されていた他の地域と違って，ダルエスサラームのアフリカ系住民はほとんど100％ TANU 支持，といわれるほどになったのである（*ibid.*, p.529; Leslie 1963, p.268）。そしてその背後には，労働組合などの他の政治組織との連携とともに，遊びのクラブによる多大な協力と貢献があった。

(3) 遊びの組織と独立運動

先に述べたように遊びの組織（*beni ngoma*）と政治組織（AA）との間のつながりは当初から存在したが，ダルエスサラームにおいて両者の結びつきが深まるのは，特に TANU 成

立以降の独立へ向けた政治キャンペーンの最中においてである。そこでは，遊びのクラブがTANUに対して，(1) 大衆動員（政治キャンペーンと党員の拡大及び資金集め），(2) 政府の弾圧が厳しい時には政治集会のカモフラージュとして，というおもに2つの仕方で協力した。

例えば，カリアコーにおける音楽，スポーツ，政治のどれにも深く関わっていた典型的な人物は，前出のAAの初期の指導者Kleist Sykesの息子Aly Sykesである。第二次大戦に従軍し，軍隊で外国のポピュラー音楽に関する知識を得たAlyは，戦後カリアコーに戻りしばらくしてダンス・バンドSky Larksを結成する。Sunderlandの選手でもあった彼は，同時に政治にも深くコミットし，54年のTANU結党時の17人の創始者のなかに名を連ねている。AlyはGraebner (1992, p.228) のインタビューに対して，大要次のように答えている。「バンドはTANUの秘密会議のカモフラージュとして演奏したほか，党の政治的闘争，旅費，パンフレット印刷のための資金作りに協力した。（独立後は）南アフリカのANC（アフリカ民族会議），ローデシアのZANU（ジンバブウェ・アフリカ人民族同盟）などによる他国の反植民地闘争支援のためカリアコーのホールで資金集めのコンサートを行ったこともある」。

このように独立前後の一時期，TANUは町のホールを借り切り，バンドの公演を行って資金集めをする，ということをしばしば行っていた。ダルエスサラームや地方都市のジャズ・バンドの多くは，党の活動資金集めのために動員されたのである。むしろTANU側が楽器購入の便宜を図るなどしてバンド結成を積極的に後押しした形跡もある。たとえば，前に少し触れたカリアコーのCuban Branchというバンドは，前述のTANU書記長Oscar Kambonaから，その初発時に楽器を与えられている。

またジャズ・バンドは，植民地的社会状況や時の政府に対する批判を歌で表現することもあり，人々はそれを聞くことを好んだ。例えば，当時モロゴロにあったジャズ・バンドCuban Marimbaの次の歌は，それを聞いた人々によって，白人，黒人，インド人をそれぞれ白，黒，赤のニワトリに例えて，人種間の争いの絶えぬ植民地的状況を風刺しているのだと解釈された（Mkabarah 1972, p.43）。

Niliona ajabu ndugu zangu mtaani
友よ，私は不思議なものを町でみかけた
Kuku watatu wanapigana barabarani
3羽のニワトリが通りで喧嘩している
Wa kwanza mweupe na wa pili mweusi
1羽目は白く，2羽目は黒い
Na wa tatu mwekundu wasitani
3羽目は普通の赤い色をしている
Kuku mweupe anampiga kuku mweusi
白いニワトリは黒いのをつつく
Kuku mweusi anampiga kuku mwekundu
黒いニワトリは赤いのをつつく
Na mwekundu anampiga yule mweupe
そして赤いニワトリは白いのをつつく
Nambieni mwenye nguvu pale ni nani?
私に教えてくれ，一番強いのはどれだろう？

またダルエスサラームのSkokian Jazz Bandは，TANU党員に頼まれてもっと露骨な次のような歌を歌って，聴衆の喝采を浴びた。

Enyi wakoloni
植民地支配者たちよ
Mmetunyanyasa kwa muda mrefu
お前たちは我々を長い間いじめてきた
Toka mababu zetu mpaka sasa hivi
我々の先祖の時代から今の今まで

ターラブのグループは，ジャズ・バンドのように資金集めに協力することは少なかっ

たが，TANU の主催する式典などに参加して演奏し，政治宣伝に協力した。政治的メッセージを隠した歌も作られた。たとえば Al-watan Musical Club のある歌手は，恋愛のことを歌った詩を作りかえて，*Tuwampenda mpenzi wetu katu hatumachi mtasema mtatoka hatoki* と歌った。これは「何があろうと，われわれは彼が好きであることをやめない。出ていくのはあなた方（植民地支配者）の方で，彼ではない」というような意味で，彼とは TANU 党首ニエレレの事を指している。ターラブ・クラブのなかでもとくに Egyptian Musical Club は TANU と近い関係にあり，ニエレレは集会での演説に際して，マイクとスピーカーを同クラブからときどき借りたほどであった。

また，大衆動員という点で特筆すべきは，50年代半ばに入党し TANU 最初の女性党員にしてリーダーとなった Bibi Titi Mohamed の事例である。当時ダルエスサラームには（未亡人や離婚者を含む）既婚女性の一種の社交集団として女性による *ngoma* のグループが幾つか存在したことは，すでに触れた。自身が Bomba というグループのリードシンガーであった Bibi Titi は，そのネットワークを利用して，ダルエスサラームの町の女性を党員に勧誘するのに，まずそれら *ngoma* のグループを動員することから始め（Geiger 1987, pp.15–17），最終的には5,000人の女性を党員としてリクルートすることに成功した（Iliffe 1979, p.518）。

音楽クラブと同様，Yanga や Sunderland, Cosmopolitan などのカリアコーのサッカー・クラブも，友好試合を組織するなどして，TANU の資金作りに協力した。とくに Yanga と Sunderland 両チームのファンは大変な数がいたので，多人数を動員することが簡単にできたのである。例えば独立前にはダルエスサラームにおいて *Madaraka* Cup や Self Internal Government Cup などのトーナメントが行われ[22]，集まった入場料が TANU に寄付されている。また Barongo（1966, pp.148–149）によれば，50年代末に TANU の党大会でアフリカ人のための大学を作る事が決議された際に，まず資金作りのために，当時事実上党機関紙のような役割を果たしていた民間の *Mwafrika* 紙主催によるサッカーのトーナメントが行われ，その優勝杯の贈呈式にはニエレレ自らが赴き，集まった人々に募金を呼びかけた。

特に TANU と Yanga は親密な関係にあり，Yanga のクラブの中では党のメンバーシップ・カードが売られていたといわれている。また TANU が公然と活動ができなかった時期には，政府の目を逃れるために Yanga のクラブが TANU の秘密集会に使われ，その外では，Egyptian Musical Club がターラブを演奏し，奥で政治集会をやっていることがばれないようにカモフラージュしていたと主張する者もいる[23]。一方の Sunderland も50年代の半ばに，自身のクラブ前でターラブの演奏会を開いてニエレレら TANU の指導者を招き，チームは TANU の忠実なメンバーであり，党に対する協力を惜しまないというアピールを行った[24]。

22) ここで *madaraka* というスワヒリ語は responsible government を意味する。つまりこの両トーナメントの名称は，アフリカ人による自治政府を要求していた当時の TANU の主張をあらわしたものである。

23) これには異論を唱える者もあり，真相は明らかではない。いずれにしろ，TANU，Egyptian，Yanga の3者が特に密接な協力関係にあったという印象を，多くの人がもっていることは確かである。

24) 以上のようなスポーツと政治運動との結びつきは，ダルエスサラームのみならず，独立前後の同じ東アフリカ沿岸部の都市モンバサやザンジバルにおいても同様にみられた。ザンジバルに ↗

7. 結　論

本稿では，おもに独立前のダルエスサラームのカリアコー地区に存在したアフリカ系住民による遊びのクラブの発展過程と，その政治運動との関わりについて論じてきた。

タンガニーカ都市部において，当初から広範かつ活発に行われ，またその後卓越した大衆的人気を得たという観点から重要である遊びの2つの分野は，ポピュラー音楽（ターラブとジャズ・バンド）とサッカーである。カリアコー地区においては，1930年代よりすでにターラブの名門グループである Egyptian Musical Club と Alwatan Musical Club が成立し，50年代から60年代にかけては Dar es Salaam Jazz Band，Western Jazz Band，Kilwa Jazz Band などの人気ジャズ・バンドがそこを拠点としていた。また同地区は，1930年代の末に，のちのタンザニア・サッカー界の2大名門チームとなる Yanga と Sunderland（現 Simba）を生み出した。政治運動に関しては，タンガニーカ独立の立役者であり，独立後一党支配をしくアフリカ人の政党 TANU の前身である African Association は，当初はアフリカ系住民の相互扶助を目的として，カリアコー地区の政府官吏と町の有力者により1929年に結成されている。

これら遊び及び政治の組織 *chama* は，いずれも人種，部族，同郷などの諸関係や，地域社会，職場，学校などの場を通して得られた身近な人間関係を最初の形成のきっかけとしているが，それをも超えた広い友人関係に基づいていた。同時に，音楽，サッカー，政治と活動分野が異なるクラブ間においても交流関係が存し，また各クラブのメンバーや支持者は人間関係的にかなり重なっており，それぞれ全く無関係に活動していたのではなかった。また，これら遊びと政治の組織は，いずれも，その発現の程度や仕方に差があるとはいえ，前代に流行した文化形式である *beni ngoma* の社会的性格やその組織編成の様式を引き継いでいるという点で共通していた。

様々な社会的背景を持つ人々によって構成されるダルエスサラームのアフリカ人社会において，上記のような活発な諸活動が成立しえた基礎的な条件として，次の諸点があると考えられる。(1) ダルエスサラームを含むタンガニーカ都市部全般におけるスワヒリ語とスワヒリ文化の広範な浸透，(2) 主要な出来事がカリアコー地区（1キロ四方ほどの広さ）とその周辺部という地域的（及び人口的）に限定された空間のなかで生起したこと，(3) 優勢な部族が存在せず明白な部族間対立がないというタンガニーカに特有の事情，(4)（アラブ系を含めた）アフリカ系住民社会の階層性の希薄さや文化的平等性[25] 等である。

このように1930年代以降のダルエスサラームにおいて展開してきた遊び活動と政治運動は，人間関係的につながっていたにしろ，当初はそれぞれ別個の領域に属する活動として行われていた。また，様々な社会階層から幅

↗ おける AA の支部は，のちのザンジバル大統領カルメによって表向き政治談義のカモフラージュとして結成されていた African Sports Club（あるいは African Dancing Club）の支持者によって，1934年頃に結成されたものである（Iliffe 1968, p.14）。またモンバサの古い市街を代表する有力者である Kindy は，1963年にのちのケニア初代大統領ジョモ・ケニヤッタの名前にちなんだ Jomo Boys というサッカー・チームを率いて，与党 KANU（Kenyan African National Union）のための資金集めを目的に試合を行っている。Kindy とケニヤッタは，「スポーツは競争的なものだけれども，全ての部族と人種を一体化するのにケニアで重要な役割を果たしていることで同意した」(Kindy 1972, pp.105–107)。

25) Iliffe（1979, p.529）は，ダルエスサラームにおいて TANU が圧倒的に優勢となった理由として，身近にある本部の存在と同時に，そこには土着の19世紀的貴族階層がなかったうえに新規移住者が優勢となったため，社会が全く無定形的であったことを挙げている。

広く支持を集めた遊び活動と異なり，初期の政治活動の担い手は，教育程度の高いエリート達にほぼ限定されていた。ところが，タンガニーカの独立を求めるというアフリカ系住民に共通の目標が誰の目にも明らかとなった時，遊びの組織は大衆動員という点でTANU に大いに協力するようになる。一方，労働組合や協同組合など当初から目的の明確であった他の政治組織は別として，ダルエスサラームの部族組織や宗教組織などはこのように積極的に政治運動に関わるだけの社会的な力をあまり持ち得なかった[26]。このことは，特定部族や特定宗教の利害と無関係であるという遊びの本来の性質とともに，遊びの組織が，他の部族的・宗教的な組織よりも相対的に活発であった，すなわち，多数の移住者を含む住民が新たな都市的社会や生活様式に適応する際のコミュニティー的基盤として，より大きな有効性を持っていたことを示すものではなかろうか。

遊びと政治という人間活動の2つの領域は，どちらも部族的・宗教的共同体を超える社会関係を形成し得る，という点で同じ性質（超部族的，超宗教的性質）を持つ。他方，近代以降の社会においては，この両者がその性質上まったく異なるものとして区別される局面が多いと考えられる。それは，政治運動は特定の明白な現実的目的を達成するために行われるのに対し，本来それをやること自体が満足をもたらす無償の行為である遊びにはかかる目的が一見ない，という区別である。

このようにわれわれの目には一見正反対の行動にみえる遊びと政治が，本稿で検討してきた独立前のタンガニーカ都市部のアフリカ人社会においては，完全に分化していない状態にあったということができる。つまりそこでは，遊びの組織は，他のグループとのライバル関係，グループ内部の主導権争い，社会批判の表現メディアとしての機能などの諸側面において顕在化するように，政治的な要素をあわせ持つ場合が多く，また現実的な目的が設定された時には明白な政治組織としての機能を果たしうる。逆に政治組織は，その目的が明白でない時には，サッカーやダンスに興じる遊びの組織のような様相を呈する。つまり状況次第で，どちらがどちらにでも転化しえたのである。

遊びと政治の両要素が未分化であるというのは，特に *beni ngoma* においてそうであったことは，すでに論じた[27]。このように遊びと政治の両方の機能を有していた *beni ngoma* が，新たな娯楽あるいは表現様式としてのポピュラー音楽やサッカーと，新たな利益の実現手段としての組合や政治団体が登場したとき，その役割をある程度それぞれに分化させ，特化させたとはいえないであろうか。その後，植民地支配からの独立というアフリカ人に共通の目標が明示された時に遊びと政治が再び手を組んだのは，双方が未分化であった一時代前のことを考えれば，自然な帰結であったということができる。

ダルエスサラームはもともと，実に様々な人種・部族や階層からなる移住民が集まってできた町である。そこに住む（アラブ系を含む）アフリカ系住民に対して共通の文化的基盤を提供したのは，第一義的にはスワヒリ語とスワヒリ文化であったが，それと同時に，身近な家族，仕事や日常生活の外にある社会的な大イベントとしての遊びと政治を中心とする共通の歴史体験があったのではないだろうか。

このように顔の見える友人関係に基づいて

26) 宗教的組織が独立運動に対して積極的に関わり得なかった点に関しては，Iliffe (1979, pp.543–552) や Barongo (1966, pp.197–200) 等に詳しい。

27) Ranger (1975, pp.101–104) は，*beni ngoma* のダンス結社がウジジ，タボラ，ドドマ等の内陸部の都市において軒並み政治組織に転化していく事例を描いている。

都市の限られたコミュニティー内部で展開してきた遊び活動と政治運動は，タンガニーカ独立後の社会的・経済的変容により，大きな変化をこうむる。それは，独立運動時代からすでに潜在的に始まっていたところの，制度化及び大衆化の過程である。それについては稿を改めて論じたい。

謝　辞

本稿の作成にあたっては，草稿段階で御助言を頂いた日野舜也教授（京都文教大学）をはじめ，いちいちお名前は記さないが多くの方々にお世話になった。これらの方々ならびに，現地での調査に協力して下さった Shikamoo Jazz Band のメンバーをはじめとする数多くの人々に対し，ここに記して心から謝意を表したい。

参 考 文 献

Barongo, Edward B.M. 1966. *Mkiki Mkiki wa Siasa Tanganyika*. Dar es Salaam, East African Literature Bureau.

Bienen, Henry. 1970. *Tanzania—Party Transformation and Economic Development* (Expanded Edition). Princeton University Press.

Coulson, Andrew. 1982. *Tanzania — A Political Economy*. Oxford University Press.

Geiger, Susan. 1987. "Woman in Nationalist Struggle: TANU Activists in Dar es Salaam." *International Journal of African Historical Studies*, 20-1, pp.1–26.

Graebner, Werner. 1992. "Music, Politics and the Media in East Africa." *Music, History, Democracy*, 1, pp.223–233, Paris, International Association for the Studies of Popular Music.

日野舜也. 1971.「アフリカ都市研究の視角」アフリカ研究会編『アフリカ諸国における経済的自立（続）』pp.111–161，アジア経済研究所.

————. 1980.「東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造」富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語』pp.173–226，同胞舎.

Iliffe, John. 1968. *The Role of the African Association in the Formation and Realization of Territorial Consciousness in Tanzania*. University of East Africa Social Science Conference.

————. ed. 1973. *Modern Tanzanians — a Volume of Biographies*. Nairobi, East African Publishing House.

————. 1979. *A Modern History of Tanganyika*. Cambridge University Press.

Khatib, Muhammed Seif. 1992. *Taarab Zanzibar*. Dar es Salaam, Tanzania Publishing House.

Kindy, Hyder. 1972. *Life and Politics in Mombasa*. Nairobi, East African Publishing House.

Leslie, J.A.K. 1963. *A Survey of Dar es Salaam*. Oxford University Press.

Lienhardt, Peter. 1968. *Swifa ya Nguvumali — The Medicine Man*. London.

Martin, Stephen H. 1980. *Music in Urban East Africa: A Study of the Development of Urban Jazz in Dar es Salaam*. Ph.D. thesis, University of Washington.

Mkabarah, Jumaa R.R. 1972. *Mwanamuziki wa Tanzania—Salum Abdallah*. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili, Dar es Salaam University.

Mwaruka, Ramadhani. 1965. *Masimulizi Juu ya Uzaramo*. London, Macmillan & Co. Ltd.

Ranger, T.O. 1975. *Dance and Society in Eastern Africa 1890–1970 The Beni Ngoma*. London, Heinemann.

Sutton, J.E.G. 1970. "Dar es Salaam — A Sketch of a Hundred Years." *Dar es Salaam — City, Port and Region* (Sutton, J.E.G. ed.), pp.1–19, Tanzania Notes and Records No.71, Dar es Salaam.

Tripp, Aili M. 1992. "Local Organizations, Participation, and the State in Urban Tanzania." *Governance and Politics in Africa* (Goran Hyden and Michael Bratton, eds.), pp.221–242, Boulder, Lynne Rienner Publishers.

和崎洋一. 1966.「Mangola 村における Bantu 系農民の部族間の関係について」川喜田二郎他編『人間—人類学的研究』pp.549–565，中央公論社.

Whiteley, Wilfred. 1969. *Swahili — The Rise of a National Language*. London, Methuen and Co. Ltd.